

A-4

スワヒリ語マクンドゥチ方言の記述から浮かび上がる*-*mala*「終わる」の文法化のプロセス

古本 真

日本学術振興会／大阪大学*

makomako1986@gmail.com

1. はじめに

本稿は、スワヒリ語の二つの変種、マクンドゥチ方言、及びウングジャ方言¹のAspect標識に関するものである。本稿の目的として次の二点が挙げられる。

- マクンドゥチ方言のAspect標識-*me-*でマークされた動詞が表す事態は、同形のAspect標識でマークされたウングジャ方言の動詞とは異なるという記述的発見の報告。
- 「終わる」> 完了相 (perfect) > 完結相 (perfective)、という通言語的にみられる変化が、スワヒリ語のAspect標識-*me-*の文法化においても仮定できることの提示。

2. 動詞の構造と形式

マクンドゥチ方言とウングジャ方言の動詞の定形は、(1) のようなテンプレートで一般化できる²。

(1) 主語－(TAM)－(目的語)－語幹

主語と目的語のスロットには、主語や目的語と一致する接頭辞が、TAM というスロットには、テンスやAspect、ムードを表す接頭辞が現われる。動詞の語彙的な意味は語幹によって表される。本稿で議論の対象とするのは、主に二つの活用形についてである。一つは、TAM 接頭辞として-*me-*が現われるもので、これはどちらの変種にもある。もう一つは、TAM 接頭辞なしで形成される活用形で、マクンドゥチ方言にしかない。前者のように TAM 接頭辞が現われる場合、語幹の最後の母音は *a* となるが、後者の TAM 接頭辞のない活用形では、次末音節と同じ母音が語幹の最後に現れる³ ((2) (3) 下線部参照)。後者の語幹形成法は、母音複写 (Vowel Copy) と呼ばれ、他のバントゥ諸語の中にも同様の活用形をもつものがある (Nurse 2008: 84–85, 271)。本稿では、便宜上-*me-*には ME、母音複写によって形成される語幹には VC というグロスを付し、-*me-*でマークされた動詞活用形を ME 形、語幹が母音複写によって形

* 本研究は、JSPS 科研費 13J03150 及び 16J03295 の助成を受けている。

¹ スワヒリ語はバントゥ諸語 (ニジェール・コンゴ語族) の一つであり、東アフリカ沿岸部に 20 前後の地域変種が存在するとされる (Nurse & Hinnebusch 1993: 5–14)。マクンドゥチ方言 (Kimakunduchi) と、ウングジャ方言 (Kiunguja) はともにタンザニア連合共和国、ザンジバル・ウングジャ島の地域変種で、マクンドゥチ方言は、ウングジャ島南東沿岸部で、ウングジャ方言は、ウングジャ島の都市部を中心とした広い地域で話されている。マクンドゥチ方言はカエ方言 (Kikae)、ハディム方言 (Kihadimu) と呼ばれる。また、ウングジャ方言は、標準スワヒリ語の基となった変種であり、標準スワヒリ語に近似している (Nurse & Hinnebusch 1993: 12)。本稿で提示するデータは、それぞれの変種の 60 代の話者から得られたものである。

² マクンドゥチ方言の音素目録は以下のように提示できる。母音 /i, e [ɛ], a, o [ɔ], u/, 無声無気閉鎖音 /p, t, k/, 無声無気破擦音 /ch [tʃ]/、有気閉鎖音 /pʰ, tʰ, kʰ/, 有気破擦音 /chʰ [tʃʰ]/、前鼻音化阻害音 /mb, nd, nj [ndʒ], ng [ŋg]/、入破音 /b [β], d [d], j [j], g [g]/、摩擦音 /f [f], v [β], th [θ], dh [ð], s, z, sh [ʃ], gh [ɣ], h/, 鼻音 /m [m~ɱ], n, ny [ɲ], ng' [ŋ], N/, 流音 /l, r/, 接近音 /y [j], w/. /N/ は成節鼻音である。/N/ の調音点は未指定で後続する子音に同化する。[]内の表記は IPA によるより近似的な音価である。本稿では[]外の表記を用いる。ただし /m/ は、接近音以外の子音が後続して成節的になる場合、*m*と表記する。上述の表記法は、標準スワヒリ語の正書法をもとにしている。ウングジャ方言については、標準スワヒリ語の正書法で表記する。

³ 多くの借用語動詞の語幹や一音節語幹、次末音節が成節鼻音の語幹はこのパターンにあてはまらない。

成される活用形を VC 形と呼ぶことにする。なお、バントゥ諸語研究では、語幹末の母音部分は独立した形態素として扱われることも多いが、本稿では分析せずに提示する (cf. Nurse 2008: 37–38)。

(2) ME 形 (TAM 接頭辞 *-me-* が現われる活用形)

- a. *ke^A-me-chekq*
3SG.SM-ME-laugh (マクンドゥチ方言)
- b. *a-me-chekq*
3SG.SM-ME-laugh (ウングジャ方言)
「彼は笑った」

(3) VC 形 (TAM 接頭辞のない活用形、マクンドゥチ方言のみ)

- ka-cheke*
3SG.SM-laugh.VC
「彼は笑った」

3. マクンドゥチ方言とウングジャ方言の ME 形が表す事態

ウングジャ方言の ME 形が表す事態は、標準スワヒリ語のものとは大きな違いはなく、既に記述が一定程度なされているといえる (cf. Ashton 1947: 37)。一方、マクンドゥチ方言の ME 形が表す事態については、未だ十分に記述がなされていない。この二変種の ME 形は、TAM 接頭辞の音形も、基準時よりも前に生じた事態を表すという点も同じだが、ME 形で表される事態は厳密にみると変種間で異なる。以下に二つの変種の ME 形の用法の違いを挙げて、そのことを示す。なお、比較のために、マクンドゥチ方言の VC 形の例も併せて提示する。VC 形も ME 形と同様に、基準時以前に起きた事態を表す。

3.1. 過去を表す表現との共起の可否

(4a) に示す通り、マクンドゥチ方言の ME 形は過去の時点を表す表現と共起することができない。それに対して、マクンドゥチ方言の VC 形やウングジャ方言の ME 形は、(4b) (4c) に示す通り、過去を表す表現と共起する⁵。(4) では *jana* 「昨日」を過去を表す表現として用いているが、他の過去の時点を表す表現 (例: *saa mbili* 「8 時」、*mwaka jana* 「昨年」) でも、共起の可否は変わらない。

- (4) a. **ke-me-nunua* *baskeli jana*
3SG.SM-ME-buy bicycle yesterday (マクンドゥチ方言 ME 形)
- b. *ka-nunuu* *baskeli jana*
3SG.SM-buy.VC bicycle yesterday (マクンドゥチ方言 VC 形)
- c. *a-me-nunua* *baskeli jana*
3SG.SM-ME-buy bicycle yesterday (ウングジャ方言 ME 形)
「彼は昨日自転車を買った」

3.2. 行為の継続

マクンドゥチ方言の ME 形の動詞によって表される行為は、開始されたのち、現在も続いているという解釈も許容されるが、マクンドゥチ方言の VC 形やウングジャ方言の ME 形ではそのような解釈は許

⁴ 定形の三人称単数の主語接頭辞は、マクンドゥチ方言では *ka-*、ウングジャ方言では *a-* となる。また、マクンドゥチ方言では、TAM 接頭辞が *-me-* の場合、三人称単数の主語接頭辞は、*ke-* という異形態で現れる。

⁵ ME 形と過去を表す表現の共起については、筆者の調査では、ザンジバル都市部出身の話者だけでなく、ダルエスサラーム出身の話者にも容認されたが、Ashton (1947) にそのような例はない。「標準スワヒリ語」における ME 形と過去を表す表現の共起の可否は、話者によって異なる可能性がある (米田信子 私信)。

されず、表される行為は終了していることになる。そのことは、(5) に示す通り、まだその行為を継続して行っていることを表す表現が、マクンドゥチ方言の ME 形には後続できるのに対して、マクンドゥチ方言の VC 形や、ウングジャ方言の ME 形には後続できないことから分かる。

- (5) a. *ke-me-kwimba*⁶ *na bado ka-na-kwimba*
 3SG.SM-ME-sing and still 3SG.SM-IPFV-sing (マクンドゥチ方言 ME 形)
 b. **k-embī*⁷ *na bado ka-na-kwimba*
 3SG.SM-sing.VC and still 3SG.SM-IPFV-sing (マクンドゥチ方言 VC 形)
 c. **a-me-imba* *na bado a-na-imba*
 3SG.SM-ME-sing and still 3SG.SM-IPFV-sing (ウングジャ方言 ME 形)
 「彼は歌った、そしてまだ歌っている」

また、スワヒリ語ではコピュラ動詞を介して、テンスやアスペクト、ムードに関する情報が表示される。 (6) に示す通り、マクンドゥチ方言では、ME 形のコピュラ動詞によって、行為が開始されていることが表されるが、ウングジャ方言の ME 形コピュラ動詞でそのような事態は表されない⁸。

- (6) a. *ke-me-wa* *ka-na-kulya*
 3SG.SM-ME-COP 3SG.SM-IPFV-eat (マクンドゥチ方言 ME 形)
 b. **a-me-kuwa* *a-na-kula*
 3SG.SM-ME-COP 3SG.SM-IPFV-eat (ウングジャ方言 ME 形)
 「彼は食べ始めている」

3.3. 経験を表す用法

マクンドゥチ方言の ME 形は経験を表すのに用いられやすい。そのことは回数を表す表現と共起できるかを、VC 形と比較するとあらわになる。一方ウングジャ方言の ME 形は、経験を表すために用いることができない⁹。

- (7) a. *ke-me-kwenda* *pemba mara t^hatu*
 3SG.SM-ME-go Pemba time(s) three (マクンドゥチ方言 ME 形)
 b. *?k-ende* *pemba mara t^hatu*
 3SG.SM-go.VC Pemba time(s) three (マクンドゥチ方言 VC 形)
 c. **a-me-enda* *pemba mara tatu*
 3SG.SM-ME-go Pemba time(s) three (ウングジャ方言 ME 形)
 「彼は 3 回ペンバ島に行ったことがある」

⁶ マクンドゥチ方言の初頭音が母音となる語幹のなかには、特定の接頭辞の後に現れる際に、無意味形態 *ku-*を伴うものがある。また、こうした語幹の初頭母音は、直前の接頭辞の最後の母音と融合 (サンディ) を起こす。(5a) の *kwimba*、(7a) の *kwenda* はそれぞれ、*-enda*、*-imba* という語幹が無意味形態 *ku-*を伴い、融合によって生じた形と分析できる。本稿では、*ku-*と後続する語幹は分けずに提示する。なお、Ashton (1947: 35) に従えば、ウングジャ方言の *-enda* も無意味形態 *ku-*を伴った *kwenda* となるはずだが、筆者の調査で得られたデータでは、少なくとも *-me-*の直後の語幹の形式は *-enda* となる。

⁷ (5b) と (7b) では、主語接頭辞の母音と語幹の初頭母音の間で融合が起きている。本稿では、融合によって生じた母音は、語幹の一部として提示する。

⁸ 筆者のウングジャ方言話者に対する調査では、(7b) のような例は容認されなかったが、Nurse (2008: 133) には、ME 形のコピュラ動詞に、未完結相の動詞が後続するスワヒリ語の例が提示されている。

⁹ ウングジャ方言において回数を表す表現は、TAM 接頭辞 *-li-*「過去」でマークされた動詞や、TAM 接頭辞 *-me-*、*-mesha-*、*-sha-*、*-li-*でマークされた動詞 *-wahi*「間に合う」を介した迂言的な表現と共起しうる。*-mesha-*、*-sha-*は完成相 (completive) を表す接頭辞である。

3.4. 結果状態を表す用法

状態変化動詞は、マクンドゥチ方言では VC 形で、ウングジャ方言では ME 形で、結果状態を表す。そのことは、副詞 *bado*「まだ」との共起から確認できる。マクンドゥチ方言の ME 形の状態変化動詞は、*bado* と共起することはできず、結果状態を表さないことが分かる。

- (8) a. **bado ke-me-lala*
 still 3SG.SM-ME-sleep (マクンドゥチ方言 ME 形)
 b. *bado ka-lala*
 still 3SG.SM-sleep.VC (マクンドゥチ方言 VC 形)
 c. *bado a-me-lala*
 still 3SG.SM-ME-sleep (ウングジャ方言 ME 形)
 「まだ、彼は寝ている」

3.5. 小括

本節でみてきた例から、動詞の表す事態は、二つの変種の ME 形で異なること、ウングジャ方言の ME 形で表される事態は、むしろマクンドゥチ方言の VC 形に近いことが分かる。次の表 1 に、ここまで挙げた二つの変種の ME 形、及びマクンドゥチ方言の VC 形の用法をまとめる。

表 1: マクンドゥチ方言とウングジャ方言の ME 形、及びマクンドゥチ方言の VC 形の用法

	過去を表す表現との共起	行為の継続	経験	結果状態
ME (マクンドゥチ)	-	+	+	-
ME (ウングジャ)	+	-	-	+
VC (マクンドゥチ)	+	-	-?	+

4. 文法化のプロセス

TAM 接頭辞 *-me-* は、動詞 **-mala*「終わる」に由来するとされるが (Meinhof 1932: 124, Mische 1979: 225–230, Nurse & Hinnebusch 1993: 376)、ME 形の動詞の表す事態が二つの変種間で異なるという事実は、*-me-* の文法化の度合いに差があることを反映していると考えられる。なお、スワヒリ語を含む東アフリカ沿岸部で話される六つのバントゥ系言語に対してサバキ祖語が再構されているが、サバキ祖語では、**-mal-* という祖形が、文法化のもととなった動詞の語根として再建されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 600)。

4.1. 完了相から完結相への変化

マクンドゥチ方言の ME 形はプロトタイプの完了相 (perfect¹⁰) に近い事態を表していると考えられる。まず、マクンドゥチ方言の ME 形は、過去の時点を表す表現と共起することができない。これは典型的な完了相の特徴である (Bybee et al. 1994: 61–62)。また、完了相では、現在と関連のある過去に起きた事態が表されるとされるが (Comrie 1976: 52, Bybee et al. 1994: 61)、開始された行為が継続しているという解釈が許されるという事実から、マクンドゥチ方言の ME 形で表される事態には、現在 (基準時) と強い関連があることが分かる。そして、経験を表す用法があるということからも、マクンドゥチ方言の ME 形が、完了相を表しているといえる。経験は、完了相の動詞で表されやすい事態の一つである (Comrie 1976: 58–60, Bybee et al. 1994: 62)。

¹⁰ Bybee (1994) は、‘perfect’の代りに‘anterior’という用語を使っている。

ウングジャ方言の ME 形は、マクンドゥチ方言の ME 形とは異なる用法をもつ。開始された行為が継続しているという解釈が許されないことから、ウングジャ方言の ME 形によって表される事態は、現在との関連がマクンドゥチ方言の ME 形と比べると相対的に薄いことが分かる。加えて、過去の時点を表す表現と共起できるという特徴があることを考慮すると、ウングジャ方言の ME 形は、プロトタイプの完結相 (perfective) に近い事態を表しているといえる (cf. Dahl 1985: 139, Bybee et al. 1994: 86)。なお、過去の時点を表す表現との共起だけみると、ME 形は「過去」を表しているようにも思われるが、結果状態を表す用法も考慮すると、「過去」という分析は不適當であるといえる (cf. Bybee et al. 1994: 92)。

Bybee et al. (1994: 69–74, 81–87) に従えば、通言語的にみた場合、「終わる」という動詞から完了相標識への文法化は十分にありうる。そして、完了相標識は完結相標識に文法化するのが自然な変化となる。ME 形が表す事態をこの枠組みに当てはめると、*-mala「終わる」から TAM 接頭辞-me-の文法化は、マクンドゥチ方言よりもウングジャ方言でより進展していると考えられる。

4.2. 結果状態を表す用法の有無

結果状態を表す用法は、ウングジャ方言の ME 形にあって、マクンドゥチ方言の ME 形にはない。Bybee et al. (1994: 78) は、基準時以前に生じた事態と結果状態を表すという二つの用法が生まれるのは、より文法化が進んでからであると述べている。つまり、結果状態を表す用法の有無に着目しても、-me-の文法化は、マクンドゥチ方言よりウングジャ方言で進展していると仮定できる。

5. 結論と課題

本稿では、まずスワヒリ語マクンドゥチ方言の TAM 接頭辞-me-でマークされた動詞の表す事態が、同じ音形の TAM 接頭辞でマークされたウングジャ方言のものとは異なることを報告した。そして、通言語的にみた場合、この違いは動詞「終わる」からの文法化の程度の違いとして捉えられること示した。

マクンドゥチ方言の VC 形は、ウングジャ方言の ME 形と共通する用法を有しており、プロトタイプの完結相に近い事態を表しているといえる。

通時的にみると、マクンドゥチ方言にみられる VC 形はサバキ祖語の前段階の、北東沿岸バントゥ祖語以前まで遡ることができる一方で、動詞*-mala「終わる」から TAM 接頭辞-me-への文法化は、サバキ祖語以降に生じたとされている (Nurse & Hinnebusch 1993: 373, 408)。

つまり、マクンドゥチ方言には、新しい活用形 (ME 形) と古い活用形 (VC 形) があり、それぞれ完了相と完結相という異なる事態を表しているのに対して、ウングジャ方言には、新たに生じた活用形 (ME 形) しかなく、その活用形は完結相を表しているということになる。この二変種における完了相と完結相を表す活用形式、更には通言語的な文法化の傾向を踏まえると、TAM 接頭辞-me-の文法化に関して、次の二つの段階が仮定できる。

前段階：ME 形が完了相を、古い活用形が完結相を表している。(マクンドゥチ方言)

後段階：古い活用形が ME 形に置き換えられて、ME 形が完結相を表している。(ウングジャ方言)

TAM 接頭辞-me-は、*-mala + *-jle > -mele > -mee > -me-という過程を経て形成されたと仮定されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 376)。スワヒリ語の諸変種は、北部諸方言と南部諸方言に二分することが提案されているが (Nurse 1982a)、-me-の形成に関与しているとされる*-jle「完了」由来の接尾辞は、もっぱら北部諸方言にみられ、マクンドゥチ方言をはじめとする南部諸方言にはない。Güldemann (2003: 187)

は、このことを理由に、マクンドゥチ方言の*-me-*がウングジャ方言からの借用である可能性を述べている。この仮説と本稿で提示した文法化の流れを併せて考えると、*-me-*がマクンドゥチ方言に借用された段階では、ウングジャ方言の*-me-*も、文法化の前段階である完了を表していたと考えられる。本稿で提示した*-me-*の文法化のプロセスの検証のためには、ウングジャ方言に ME 形がより完了相に近い事態を表していた段階があったかどうか、あるいは、*-me-*が形成されたとされる北部諸方言のなかに ME 形が完了相を表す変種があるかどうかの調査が必要となるだろう。例えば、ケニア・ラム諸島のスワヒリ語諸変種では、ME 形と **-ile* に由来する接尾辞でマークされた古い活用形が併存していることが報告されているが (Nurse 1982b: 103)、この二つの活用形が表す事態に、どのような違いがあるかは記述がなされていない。

略号一覧

3: 3 人称 (3rd person)、COP: コピュラ (copula)、IPFV: 未完結 (imperfective)、SG: 単数 (singular)、SM: 主語標識 (subject marker)

参考文献

- Ashton, Ethel. O. (1947). *Swahili Grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.
- Bybee, Joan L., Perkins, Revere, & Pagliuca, William. (1994). *The evolution of grammar: The grammaticalization of tense, aspect and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. (1976). *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen. (1985). *Tense and aspect systems*. Oxford: Blackwell.
- Güldemann, Tom. (2003). Grammaticalization. In Derek Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu languages* (pp. 182–194). London: Routledge.
- Meinhof, Carl. (1932). *Introduction to the phonology of the Bantu languages (translated by N. J. van Waremelo)*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Miehe, Gudrun. (1979). *Die Sprache der älteren Swahili-Dichtung (Phonologie und Morphologie)*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Nurse, Derek. (1982a). A tentative classification of the primary dialects of Swahili. *Sprache und Geschichte in Afrika* 4, 165–206.
- . (1982b). The Swahili dialects of Somalia and the northern Kenya coast. In M-F. Rombi (Ed.), *Etudes sur le Bantu oriental (Comores, Tanzanie, Somalie, et Kenya)*. (pp. 73–146). Paris: Société d'Etudes Linguistiques et Anthropologiques de France.
- . (2008). *Tense and aspect in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
- Nurse, Derek, & Hinnebusch, Thomas J. (1993). *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Racine-Issa, Odile. (2002). *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar : Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.